



今回は、カトウ族の子どもたちが通う学校の様子をご紹介します。ベトナムでは学校に通える子どもたちの割合が95%に達しましたが、山岳地域は差があるものの80%台と言われています。まだまだ全ての子どもたちが学校に通えていないのが現状です。

学校

ベトナムでは、小学校は5年生まで、中学校は4年間、そして3年間の高校教育があります。小学校は2部制で午前の部と午後の部に分かれて勉強しますが、カトウ族の子どもたちが通う小学校では授業は午前中だけ、午後は一応復習の時間とされています。科目は国語や算数、歴史、科学、体育などがあります。美術や音



楽、そして高学年になると、最近英語の勉強も始まりました。音楽クラブや伝統舞踊クラブのクラブ活動も盛んで、時折スポーツ大会や学芸会なども開催されます。夏休みは6～8月中旬まであります。

私たちFIDRが支援している地域内には、5年生までの全学年のクラスがそろっている「センター校」が一つあります。その他は各村に「分校」があります。「分校」では、全学年ではなく二～三つの学年のクラスが開かれていま



旧校舎の様子



新校舎で学ぶ子どもたち

ラスを受け持ち、児童の学年によっては他の村にあるクラスに通うことも珍しくありません。センター校から離れて暮らす子どもたちは、だいたいこの分校に通っています。

最近では、「分校」の環境を改善するために、校舎が新しく建て直されることも多く、私たちもいくつかの支援をしてきました。以前の分校は、もともと学校として使用されていない建物も多くありました。壁や屋根に隙間があったり、柱が十分な強度がなかったり、暗い教室も多く、子どもたち

学習環境が改善

公益財団法人国際開発救援財団 (FIDR)

国際援助を行う民間の非政府組織 (NGO)。1990年に設立され、東京に本部を置いています。

ベトナム、カンボジア、ネパールで現地の行政機関や団体と協力して、貧困状態にある人々の生活を向上するために支援しています。日本では、岩手県山田町と大槌町を中心に東日本大震災の被災地の復興支援に取り組んでいます。98年にベトナム中部のダナン市に事務所を設立。

が安全で快適に学習できる状態ではありませんでした。

しかし、校舎が新しくなることによって、子どもたちの学習意欲も高まり、学校に通う子どもたちも増えてきました。やはり新しく整備された校舎は、子どもたちや先生にとって、気持ちを一新するよい機会となるようです。

(大槻修子)

ベトナム豆知識

ベトナムには主要な河川が二つあります。北部を流れる紅河(トンコイ川)と、南部を流れるメコン川です。メコン川はチベット高原を源流として、中国、タイとラオスの国境、カンボジアを通じて流れてくる「国際河川」で、ベトナム南部から南シナ海へと抜けます。5月から11月にかけてインド洋を経由してやってくる南西モンスーン(季節風)は、アジア大陸の東南部に大量の雨を降り注ぎます。この雨が山の土を削り、その土砂が川に流れ込み、河川のいたるところで堆積します。このため河口には大きなデルタと呼ばれる三角州を形成します。このデルタは水田耕作などに適していて、その一帯は穀倉地帯となります。

(狩野ますみ)

北部の紅河と南部のメコン川にもこのデルタが形成され、それぞれ「紅河デルタ」「メコンデルタ」としてベトナムの重要な穀倉地帯となっています。紅河デルタでは米の2期作(1年間に米が2回収穫できること)、メコンデルタでは3期作が行われるなど、その生産性も非常に高いのです。

気候

7月から11月は、日本と同じように台風が多い時期です。特に中央部を直撃することが多く、大きな被害を受けやすいです。北部は温帯性気候で、4月から10月まで雨期となり、首都ハノイの平均気温は1月が16度、7月が29度、年平均降水量は1700ミリメートル。一方、ホーチミンがある南部は熱帯性気候となり、平均気温は1月が18度、7月は33度で、年平均降水量は1000ミリメートル。北部に比べると少ないのが特徴です。



世界史の現場で

国として認められたい

【2008年コソボ独立】

コソボ

国名	コソボ共和国
首都	プリシュティナ
面積	約1万平方キロメートル
人口	約174万人
	(2012年推定)
現地通貨	1ユーロ=110円

東欧のコソボが今年、2008年の独立宣言から5周年を迎えます。独立といっても、国連加盟国193のうち、日本を含む97か国しか国として承認していません。

なぜコソボは一方的に独立宣言したのでしょうか。

コソボ北部にミトロビツァという町があります。町を流れるイバ川に橋が架かっていますが、写真のように土砂のバリケードがあり、車は通れません。北側はセルビア人が多く住み、南側はほとんどアルバニア人です。国が二つあるかのようです。

アルバニア人は人口の9割を占めますが、東西冷戦ころのコソボはユーゴスラビア連邦セルビア共和国の自治州で、少数のセルビア人が多数のアルバニア人を支配していました。1990年にコソボ自治州は独立を宣言しましたが、セルビアは認めず、独立運動が始まりました。最後は武装闘争になり、99年にアメリカ軍など北大西洋条約機構(NATO)軍が空爆を行い、紛争は終わりました。

セルビアはコソボを国として認めていません。セルビアの友好国で、国連安保理常任理事国のロシアも認めておらず、



ミトロビツァ中心部を流れるイバ川に架かる「新橋」。土砂のバリケードが積み、人だけが通行できるミトロビツァで

コソボは国連に加盟できません。コソボは一方的に独立を宣言するしかなかったのです。

コソボ政府は「少数派セルビア人の権利も保護する」と約束していますが、セルビア人はセルビア政府の支援を受けて暮らしており、「セルビアに残りたい」と考えています。

ただ、コソボもセルビアもヨーロッパ連合(EU)加盟を目指しています。EUの仲介で12年10月からコソボとセルビアの首相の直接対話も始まり、安定がもたらされると期待されています。

【コソボ・斎藤義彦、写真も】